たしてお草の上い全種で樹たえられていた。首を祀った 「裕」の周囲
コ東
まっ
ア
い
式
一
人
依
エ
し
い
唇
は
よ
。 らしく少々、不合句法は、顔幻安らかい見える。 「後でいいかない、カングのことがあるから」 「もの者。何がったのふ」

二人の地位ちきコカ県の僧伝予ひぶアソる。 Eシュてお かを見示く対り致わか。 10

「そう。サントが形んけんだ。屋財の棘から落さて。みん なき集まってるから」

> る決定事項だ。突発的な仲間の早逝を訝り、恐怖に身を震 いである。彼らにとって死は、一定期間が過ぎた後に訪わ ヨシュアとエリ以外の九名の反応は、有体に言って戸惑

表示される エリが筒の表面に掌を置いた。すぐさま十六桁の数字が

並び、『同様の処理となる』と指示がある。 「神様。あなたの知恵と偉大さをお示しください 光の文字が浮かび上がった。日付、数字と記号の羅列に

屠所の羊 エリは、本をめくっていた。

「はい。……みんな。カレブを『塔』の中へ!」

かられ、古村光となり、空を幾条いも公園もる。 「ないないと」といる。……。」といないない。 「ヨシュア以外は、外へ」

口多開き体わるエじの背数ア『大』式さ体転知え多わり

エリおヨシュアに肩を貸し、始き魅した。

「シ婦」

「十四年かき大変そこ式。 百五十年 打、無野 びょ。 知 う コ

「ここうここ。そみは、黄を越えたのこ。こうしてら、

。とより後に見

「ヨシュアは、村の境を越えたんだ」

ランエアの手に目を留めたエリの顔は、明日とお明の鷺

いて別の日付、番号が打ち出された。 「どうしてヨシュアも?」 本を繰っていたエリが再び、命じる。 エリの言葉にヨシュアを含めた三名がカレブを運ぶ。続

きが辺りを満たす。 疑問の声にエリが答えた。息をのむ気配、押し殺した囁

「悪いけど、服を脱いでもらえる。カナンの物は『塔』の

12

0. 445 ----- 0. 4410 年る 214

名

います

ン、楠樹暖様(@kusunokidan)の作成図を使用して

(G44)

Eシェてお手を張る。大地コ完全コ強しお筒の中かE シュアとカレアの姿が崩れ、白い解かな堕となった。爾き 2246

ヨシュアお、触い乳を服をエリコ難しお。 筒お、ヨシュ ての背大却との高さいかり上沿っている。カレアの綴い日 シェア依立にと蘇やない下剤し飲めず。 「そんであかけてどめん」

ななら天へと程っている。

中い特さ込めおい」

一四お班以代し、夏の竪むさ増の内飆なおよれ空辰の中で ヨシュアは、
顕きをよそ
は
許を
練
的
も
ア
い
る
樹
木
に
近
い 場気を立てていた。

てい鼻の式で増と 登録な争い、血を流している。 不重な

資酵の目的お明らんぎ。 ヨシェアを献食しまいのである。 ヨシェアが、この易を去れば、戦闘お沈籍小するおずだっ **数約、『大』 さきな 登録 3 手ひ こ 割りまの 多見情らり、** き、おお、ヨシェアお、この事情にまっまう関値しまい。

ゔいかを、「大』 式きお中間の死科を一 (作) 別集もおいめる。

ランエてお掌で散パアいるが多郷めき。 沙谷の赤仏 支冑

。やいしの後と 「ームエベE」

シュアの顔に笑みが浮かんだ。

くに見えていた花が今は自分の手にある。それを眺めるヨ せず、甘い香りを放っている。ヨシュアは枝を折った。遠 く。散策といった足どりだ。花も、この地獄絵図にわれ関

「……我からないがら、」

に唸り声が響いてくる。

振り向いた先に片目の潰れた獣が佇んでいた。四本の足

空は青いまま晴れわたっていた。首を傾げるヨシュアの耳

ふいの遠雷に驚き、ヨシュアは天を見上げる。しかし、

何なるこれの? もとい音がっかけど」 小り書ってきずのおエリぎった。

いさをふりはい、森の奥へと逃り去った。ヨシュてを一顧

一重の出来事

「」となりまの

いまないまないま

のいまない

のいま

容量である。

傾姿勢をとった途端、獣の腹から血液がふき出した。苦痛 で身を支え、荒い息を吐いている。ヨシュアに向かい、前

> 獣は言葉にもゼスチャーにも反応しない。おそらく定例に 沿った行動しか許されていないのだろう。 ヨシュアは頭の横で指を回し、尻を叩いて見せた。だが、

獣は、ただヨシュアの動きを目で追っている。ヨシュア 「ぼくを見ろ! よくもこんな目に遭わせたな!」 軽侮という行為を理解しているかどうかさえ怪しかった。

唸り声をあげる。瞬間、獣の体は横ざまに弾き飛ばされた。 は足元の石を拾い、獣に投げた。斜め前方に回避した獣は 強い体毛に覆われた巨大な腕が現れる。鋭い爪から血が

「森いお、塔ろしい経球ないるん式。知り式さを負かさず 再で回塾をあれ、到耐却爪を突き出す。 『みなぞく

ささな行っているの**幻集因**を主体しき特人類であった。常 以別え、 追い式ア了財手の無視な値き多穏で。 強管依蓄財 **科はいっちょいによるいのでは、関本としてのたの禁む | 類談法。 資質の重パコピパア幻百き承昧なの針をで。「大』**

がろうとしていた。しかし、裂けた皮膚から肉が覗き、血 の間にも獣が、背中から腹にかけて傷を負いながら立ち上 液が絶えず流れている。果たせず、頭だけをもたげた。遠 ヨシュアは動くこともできず、力の権化と対峙する。そ

路集するための行動だったのだ。

光の中でなををかのない猫の私が、今後了地面以頭直を 新の中でなすもかのない ある。 轟音化大戻を 高なりま。 °4

L りてくる。 Eシェての韞閣を決勝と見引のさるで。 増約日 音まれななら天多期よぎ。 光の卦な Eシュてい 向体 こう刹 シュアへ本当かりした。ヨシュアは、館界の内側へと戦か れる。米の針お、ヨシェトのいれ場所は立っていればを貫 に欅足の直、店、主。く核玖真のトラスにいるに働

獲なさ向き載え、前後しなならまっている。 戯目いお対郷 的で冗様のようできあった。

> しかし、痛む足では、まともに走れない。ヨシュアにとっ 獣は境界侵犯に対する定例に従い、行動するはずだからだ。 て幸いだったのは、獣の負傷が深刻だったことだ。獣の命 ヨシュアは、かけ出した。目指したのは、村の境である。

のためか体勢が崩れ、獣はよろける。

は、地面を叩く体液とともに失われようとしている。 追いかけっこの始まりだ

が、木々に阻まれ、かげって見えた。その下をヨシュアと 雷鳴が、だんだん大きくなる。空は以前、快晴であった

> 滴っていた。小山のような体を後ろ足二本で支え、耳をつ んざく咆哮を放つ。目は一点、ヨシュアを見つめていた。

た。『犬』たちである。さきほどの遠吠えは、獣が仲間を 吠えを始める。 突進してくる怪物に黒いものがぶつかっては弾かれてい